

「神に従う」という説教題をつけました。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」というペトロの言葉が今日の聖書には出てきます。

「神に従う」ということはどういうことなのでしょうか。わたしたちは生活の中でどう神に従っているのか。どう従えばいいのか。

使徒言行録を読み進んできました。ここまでのところを少し整理しておく、イエス・キリストが昇天された後、聖霊が降り、はじめの教会が生まれていきました。そして、イエス・キリストの福音を宣べ伝える歩みが始まりました。福音が宣べ伝えられることで、多くの人たちが教会の輪の中に入ってきました。一方で、福音が語られることで、摩擦が生じ、軋轢が生まれ、対立が鮮明になり、攻撃も受け、弾圧も受けていくようになります。

使徒たち、弟子たちの多くは、もともとユダヤ教徒でした。その彼ら彼女たちがイエスこそ神の子、救い主だ、というのですから、イエスを神の子救い主などとは認めないユダヤ教側からすれば激突は必至でした。しかもそれをユダヤ教の神殿境内で語っていたのです。軋轢が生じないはずはないのです。大祭司、サドカイ派、ファリサイ派といったユダヤ教中枢の人々は、生まれたばかりのキリスト教会のこと、その存在そのものを、認めることなどできなかつたと思います。ユダヤ教にしてみれば、神の子、救い主などまだ来ていない、と判断しているのですから、教会はデタラメなことを語る集団以外の何ものでもない。しかも使徒たちは、イエスを十字架にかけた責任はユダヤ教の最高法院をはじめ、その中枢にあると断言していたのです。またあなた方が十字架にかけたイエスを神は復活させられた、との発言も聞き流すことのできない発言であり、使徒たちを逮捕したのも、ユダヤ教側にすれば当然の行為だったのでしよう。

そうした中で、教会に加わる人、加わらない人がいたことが、12 節から 16 節には記されています。加わらないが称賛していた人がいたことも、記されている。イエス・キリストの福音が語られる、するとそこで、一人一人のキリストに対する態度が現れてくる、ということなのです。

17 節からは使徒たちの再逮捕が記されています。大祭司はじめサドカイ派の

人々によって、使徒たちは牢につながれた。ところが、夜中に主の天使が牢の戸を開け、使徒たちを外に連れ出したのです。

再逮捕されたにもかかわらず、主の天使によって救出された。使徒言行録には、12章でペトロが、16章でパウロが逮捕されたときにも、こうしたことが起こっています。そういう事件が多く記されているということは、主の天使による救出ということがたびたび起こったということなのでしょう。多く起こらねばならなかった、ということは、主がそれを必要だとされた、ということなのでしょう。伝道が開始されたとき、神は特別な仕方、種をまき続ける者を導かれたということでしょう。

ところでここに、注目すべき言葉が語られています。

「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい。」

牢から救出されたばかりの使徒たちに対して、天使は、行きなさい、という。いのちの言葉を残らず人々に告げるために、行きなさい、という。福音を語ることにひるんではならない。福音を語るのに、もっと別な場所もあつただろうに、神殿の境内で、ひるむことなく福音を語りなさい、と天使は言うのです。

しかし、この言葉、よくよく考えると不思議です。考えてみれば、これほどの力ある天使です、牢の扉もあけてしまう、使徒たちを解放するだけの力のあつた天使。その天使が福音を語ればいいのか、とも思うのです。

そもそも過ちの多い人間、罪深い人間、そんな人間にこだわらずに、天使が福音を宣べ伝えたらいい。実際、クリスマス時には、天使たちが語り、天使たちが賛美しているのです。しかし、それにもかかわらず天使は、人間に、キリストの弟子たちに「行って神殿の境内に立ち、いのちの言葉を残らず告げなさい」と命じるのです。

福音を語る、宣べ伝える、ということはあなたたちがするのだ、という基本形がこの使徒言行録に何度も何度も繰り返されていく、それがイエス・キリスト昇天後の世界における伝道なのだ、ということを使徒言行録は繰り返し語る。なぜなのでしょう。福音というのは福音に聞き、その命の言葉に与った者が語る言葉なのだ、ということだからでしょう。いのちの言葉とは、救いの言葉ということです。この救いの言葉は救いに与った者が宣べ伝えるのです。イエス・キリストの十字架と復活の救いに与った者が、感謝と喜びをもってこれを語る、それ以外ではない、ということです。天使たちは、その働きをキリストを信ずる一人一人に託していかれる。

使徒たちは牢から出ると、夜明けごろから神殿境内で語り始める。

逮捕され、牢から出られたばかりだというのに、間髪を入れずに語り始めていく。

わたしたちは、彼らの伝道行動というものの、衝き動かされるようにして伝道活動へと向かう、その姿をとにかく記憶しておきましょう。

一方、ユダヤの最高法院の人々は、この間髪を入れない使徒たちの伝道活動に怒りを覚えます。直ちに使徒たちを引いてきて、彼らを尋問し、譴責するのです。「あの名によって教えるはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」その時、ペトロと他の使徒たちは、応えるのです。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」

ペトロは4章のところでも、同じような言葉を語っています。「神に従わないであなた方に従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。」

「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」ペトロが重ねてこういう答え方をしたのは、理由のあることでした。それはペトロ自身が、人間に従って生きてきたからでしょう。ペトロは人間に従って生きてきた。具体的には自分に従って生きてきたのです。自分に従うとはおかしな表現ですが、自分の考えや、自分のものの捉え方、そういうものに従うのです。自分のがんばり、自分の力、自分の知恵や経験、それを大事にして、結局はそれに従って生きてきたのです。しかもそのこと自体にあまり気づいていなかった。自分に従っている、という自覚がない。

しかも話がやっかいなのは、ペトロは自分の力に頼って生きていた時、彼自身はキリストにどこまでもついていく、と思っていたのです。

自分に従って生きているとき、自分の意識としては、キリストにどこまでもついていく、と思っていたということです。キリストについていくことも、結局自分の信念とか頑張りとかでやり抜こうとしていた。実にやっかいです。

神に従おうと思っていたのです、ペトロは。しかし実際は自分に従っていた。その自分に気づいていくのは、イエス・キリストを裏切った後、その裏切った自分をキリストが十字架で背負ってくださったのだ、ということを知らされたことです。

その時ペトロははじめて、自分は骨の髄まで自分本位で、自己中心的で、自分に従うものだけけれど、その自分がキリストに担われているんだ、ということを知ったのです。

ペトロは、説教を語り始めたとき、反省も懺悔も語っていない、という話を3章のところでした。反省とか懺悔というのは、一見もっともらしいので

すが、反省することによって、その時の自分よりまともな自分になれる、というようなことは、ペトロはもう考えられなかった。反省をどれだけ重ねても、変わらない自分がある、ということにペトロは気づき始めてきたのです。骨の髄までどうしようもない自分がある、罪とはそういうことです。しかしその自分が丸ごと背負われている、担われている、愛されている、活かされている。

その時彼ははじめて、人間に従う、のではなく、神に従うのが、人の人生、ということが腹に落ちてくるのです。人間に従うよりも、神に従わなくては、というのは、単なるキリスト教のお勧め、ではない。そうしなければ、わたしという人間は絶望だ、ということが根底にある。

それは、ペトロが劇的な転換を遂げて、以後、どんな時も神に従う人間になった、という意味ではありません。彼もまた、繰り返し人間に従う人間であったでしょうし、人間に従うという誘惑の中に彼もいつもあったでしょう。

しかし、人間に従って生きようとしている自分という自覚が彼の中にあり、神はこのわたしが、神に従って生きることへと深く豊かに、招いてくださっているということを彼は受けとめていました。ペトロの答弁は、誰よりも自分自身に向かって、繰り返し語られた言葉でした。

最高法院の人々は、福音宣教をやめない使徒たちに激しく怒り、殺そうと考える人たちもいました。だが、ガマリエルという人々からの尊敬を集める律法の教師があの人たちの扱いは慎重にすべきだとの提案をする。最高法院の人々はガマリエルの言葉に同意して、使徒たちに鞭打ちの刑を与え、イエスの名によって語るな、と命じたうえで、使徒たちを釈放したのです。

その時も使徒たちは、恥ずかしそうに帰ってきたのではなく、喜びながら帰ってきた、というのです。そして禁じられた宣教の働きを、毎日、さまざまな場所でつづけ、語り続けたのです。驚くべき伝道行動です。わたしたちは、彼らを突き動かして、神に従うものとして、伝道へと向かうものとして、活かしてくださっているその神の強い招きに目を凝らしたいと思います。